



Project Adventure Japan

<実践報告>

プロジェクトアドベンチャー の実践を活用した学級経営 の効果について

—子どもたちの手で行われるクラス経営を目指して—

はじめに

【目的】

プロジェクトアドベンチャーの手法を取り入れた学級経営が、「満足型」の学級をつくることに効果的であることを検証する。

【仮説】

- ①PAのアクティビティを実施することによって「リレーション」が高まる
- ②ビーイングを活用することによって「ルール」が共有される

よって、集団を規定する必要条件とされる「リレーション」と「ルール」が確立され、「満足型」の学級づくりに効果を及ぼす。

方法

【調査対象】

小学校2～6年の15クラス、496名

【調査方法】

- Q-U
- アンケート調査
- インタビュー調査

【調査時期】

アンケート調査：2回のQ-U実施に合わせ郵送法にて

Q-U1回目：2013年5月末～2013年6月中旬

Q-U2回目：2013年11月末～2014年1月初旬

インタビュー：2014年2月初旬～中旬

結果と考察①：高学年

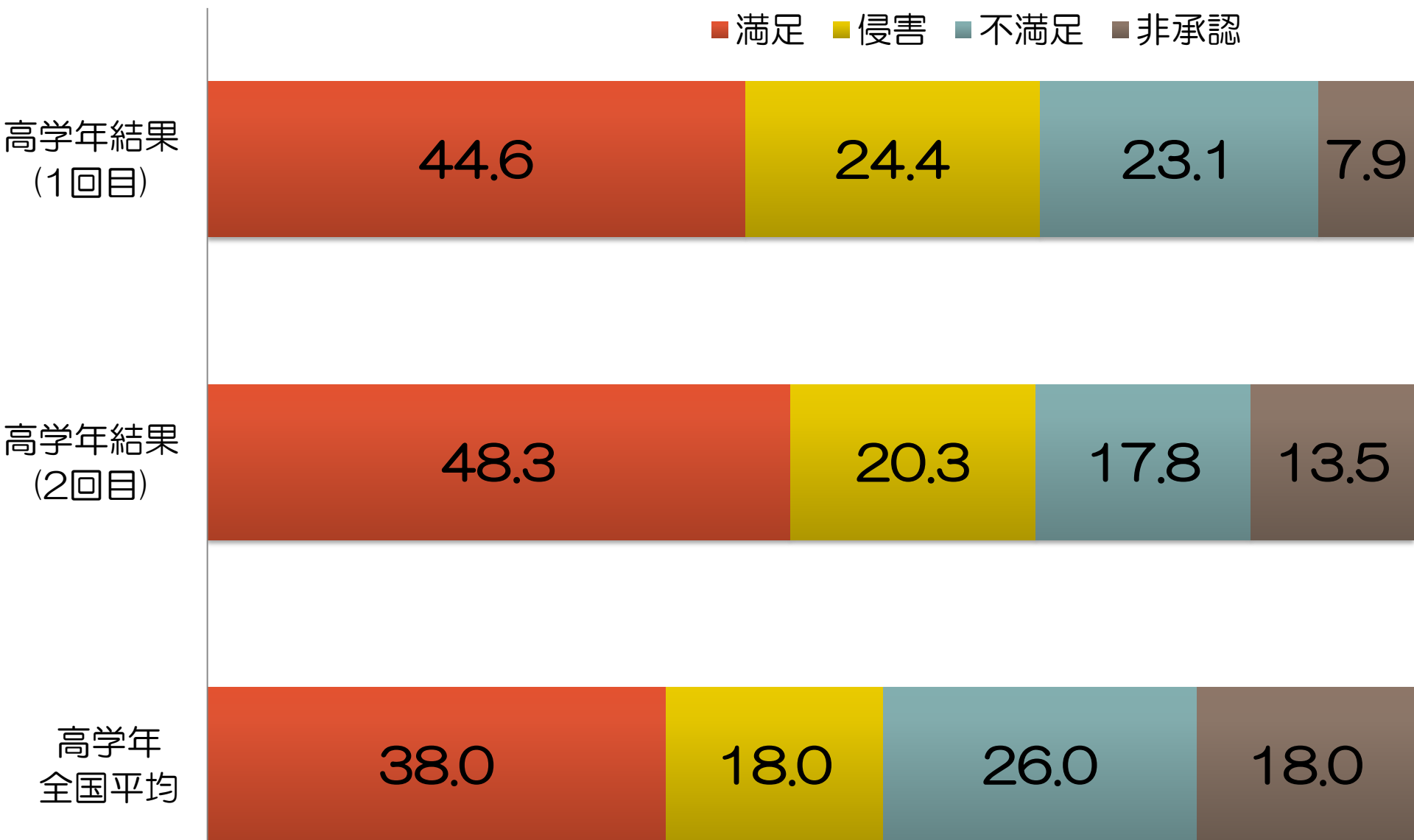


図1 調査対象クラスの平均値の比較（高学年）

結果と考察①：高学年

高学年（4年生5クラス 5年生3クラス 6年生2クラス 計10クラス）

- ・前年度から持ち上がり（クラス替えあり） 1クラス
- ・前年度から持ち上がり（クラス替えなし） 4クラス
- ・新規で担任する学年（クラス替えあり） 2クラス
- ・新規で担任する学年（クラス替えなし） 3クラス

①「学級生活満足群」において、全国平均より
高い値を示している

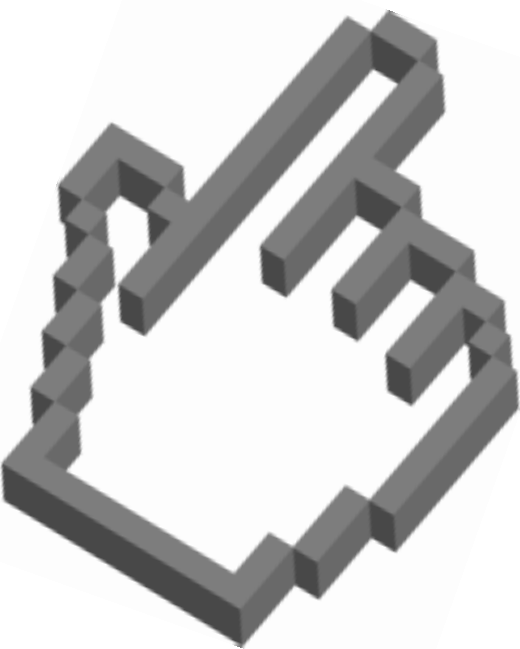
②「学級生活不満足群」において、全国平均より
低い値を示している

③1回目の調査より2回目の調査時において、
好結果が出ている。
（クラス替えは10クラス中3クラス）

結果と考察①：高学年

★ほとんどがクラス替えをしておらず、ある程度の関係性ができていることが想定されるにも関わらず、1回目よりも2回目の調査で好結果が出ている

→1回目と2回目の調査の間のどのような実践が結果に影響したかを検討する必要がある。
(インタビュー調査による事例研究を参照)



結果と考察②：低学年

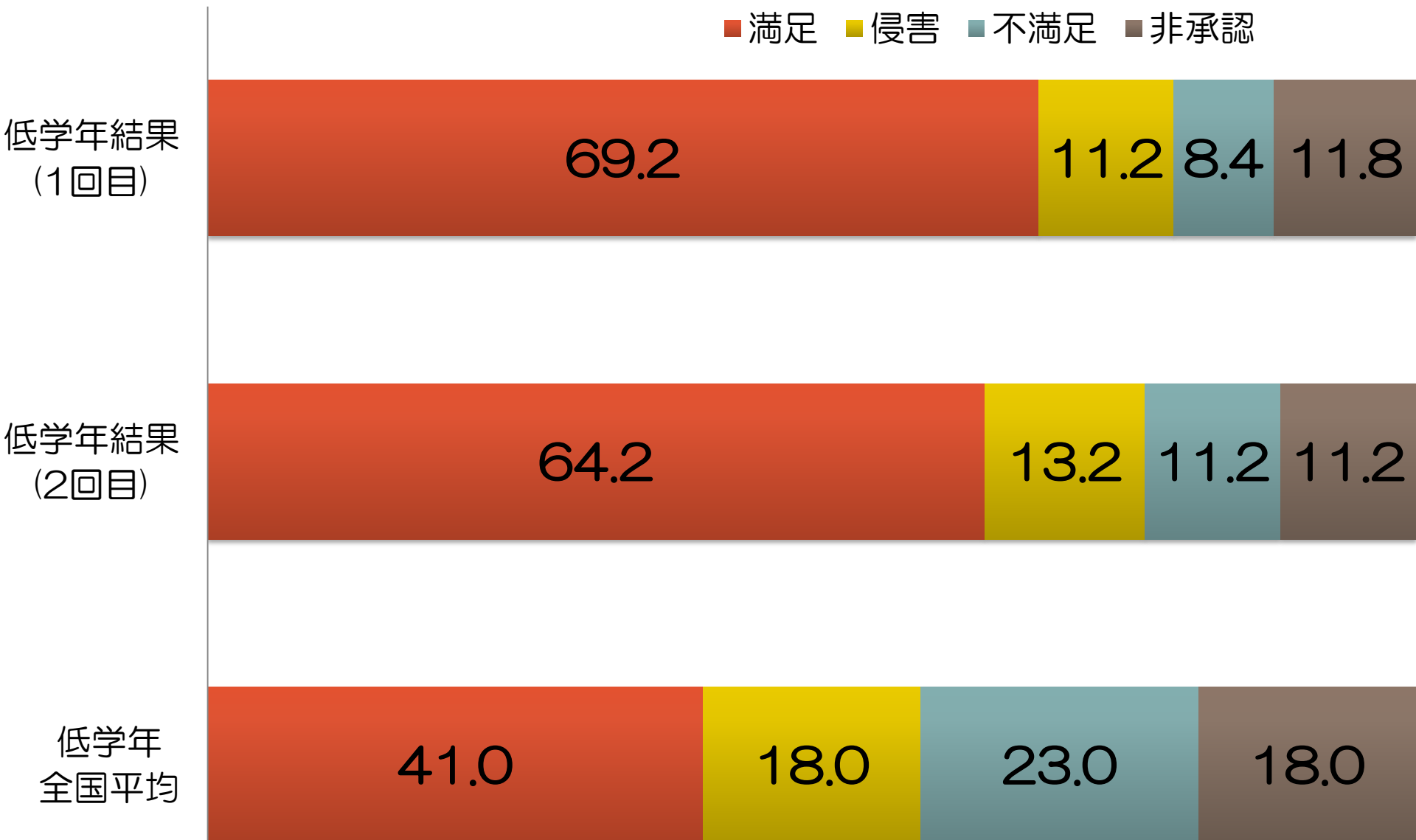


図2 調査対象クラスの平均値の比較（低学年）

結果と考察②：低学年

低学年（2年生1クラス 3年生4クラス 計5クラス）

・前年度から持ち上がり（クラス替えあり）	1クラス
・前年度から持ち上がり（クラス替えなし）	0クラス
・新規で担任する学年（クラス替えあり）	3クラス
・新規で担任する学年（クラス替えなし）	1クラス

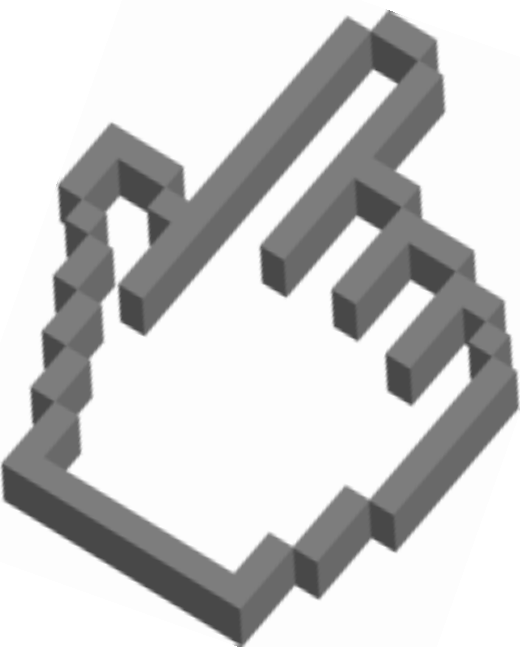
①「学級生活満足群」において、全国平均より
高い値を示している

②「学級生活不満足群」において、全国平均より
低い値を示している

③1回目の調査から高い数値が出ている
（クラス替えは5クラス中4クラス）

★ほとんどのクラスがクラス替えをしているにも関わらず、1回目の調査から高い数値が出ている。

→低学年においては、1回目の調査までの初期段階における関係づくりのアクティビティが効果を上げている可能性がある。逆に高学年においては、初期段階の関係づくり以降の取組みが重要である可能性が考えられる。
(今後、実施アクティビティを分析)



事例①

事例①：要所にアクティビティを実施して、3年次の関係性を編み直した事例

【対象】 4年生 34名（クラス替えなし、学年は2クラス）

【担任】 新たにこの学年の担任になった男性教員。PAの実践は2～3年くらいで、本格的に導入するのは今年度が初めての年である。

【4月～1回目の調査まで】

3年次にいくつかの問題があり、女子の関係などで難しさを抱えた状態でクラスが始まる。インタビューの中で担任教員は、「(アクティビティを通して)僕との関係を直接つくるわけではないけれど、クラスという空間をつくるという意味で僕をまじえてクラスが安心をつくる感じがする。PAがなくても遊びやクラス経営の中で出来ると思っていたけど、PAって便利。」と語っている。それ以外にも、ペアトークなどでたくさんの人とコミュニケーションをとる活動を繰り返しているとのことであった。また、「例えば僕が『こういうクラスにしよう』と言うと押し付けになっちゃう。でもPAを通してだと、こういうことしようという提案が子どもたちの実感になる」という話から、アクティビティ体験を通してクラスの枠づけ(フレーミング)を行っていることがわかる。

【1回目の調査～2回目の調査まで】

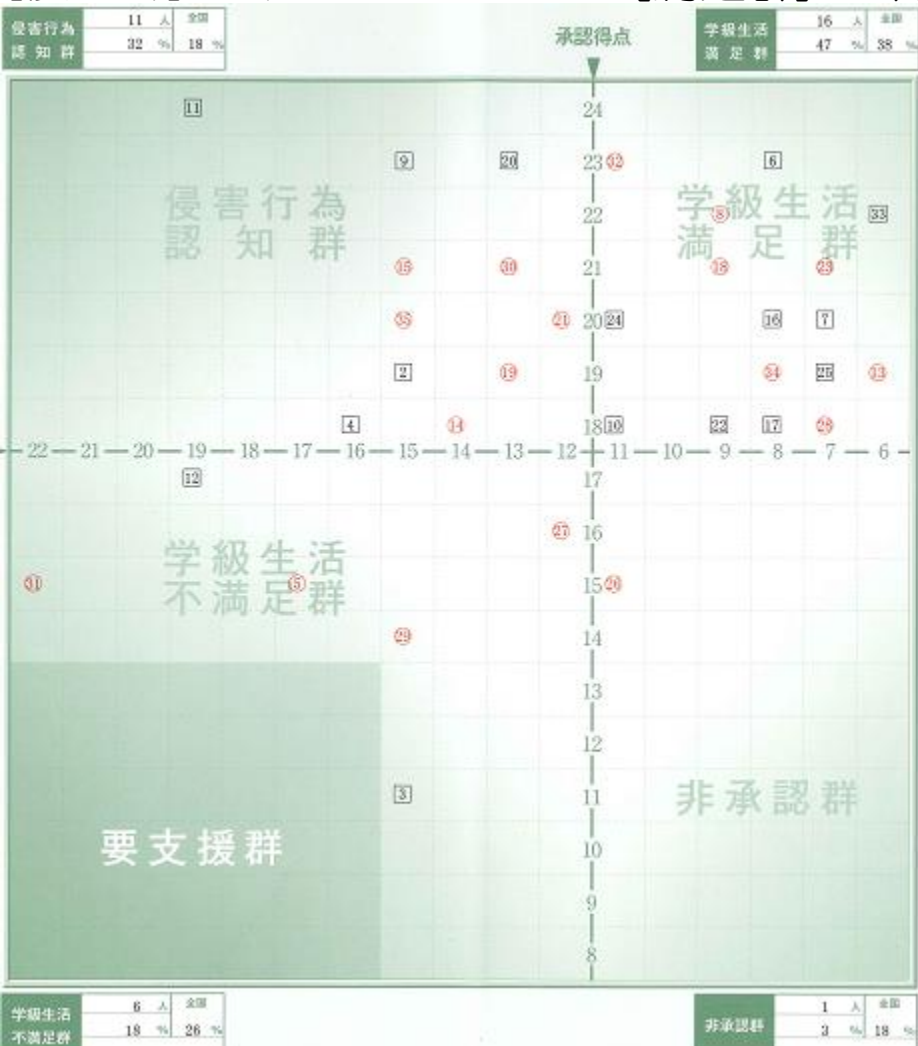
「夏休み明けはドキドキの中に不安も期待も混ざっている。それを、期待のドキドキにしたい。4月と同じ」と、9月にもアクティビティを丁寧に実施していることがわかる。しかし、「(もっと割り切ってやればよかった」と、思っていたよりも時間をさけなかったようである。アンケートには、「PAはほとんど実施できなかったが、授業の中でグループで課題解決をするなど、PAの考え方を授業に取り入れて行っていた。授業の説明やふりかえりの中でも、『PAの時みたいに』そんなフレーズが多かった」と記載している。

事例①

1回目調査時(6月6日)

[侵害群]32%

[満足群]47%



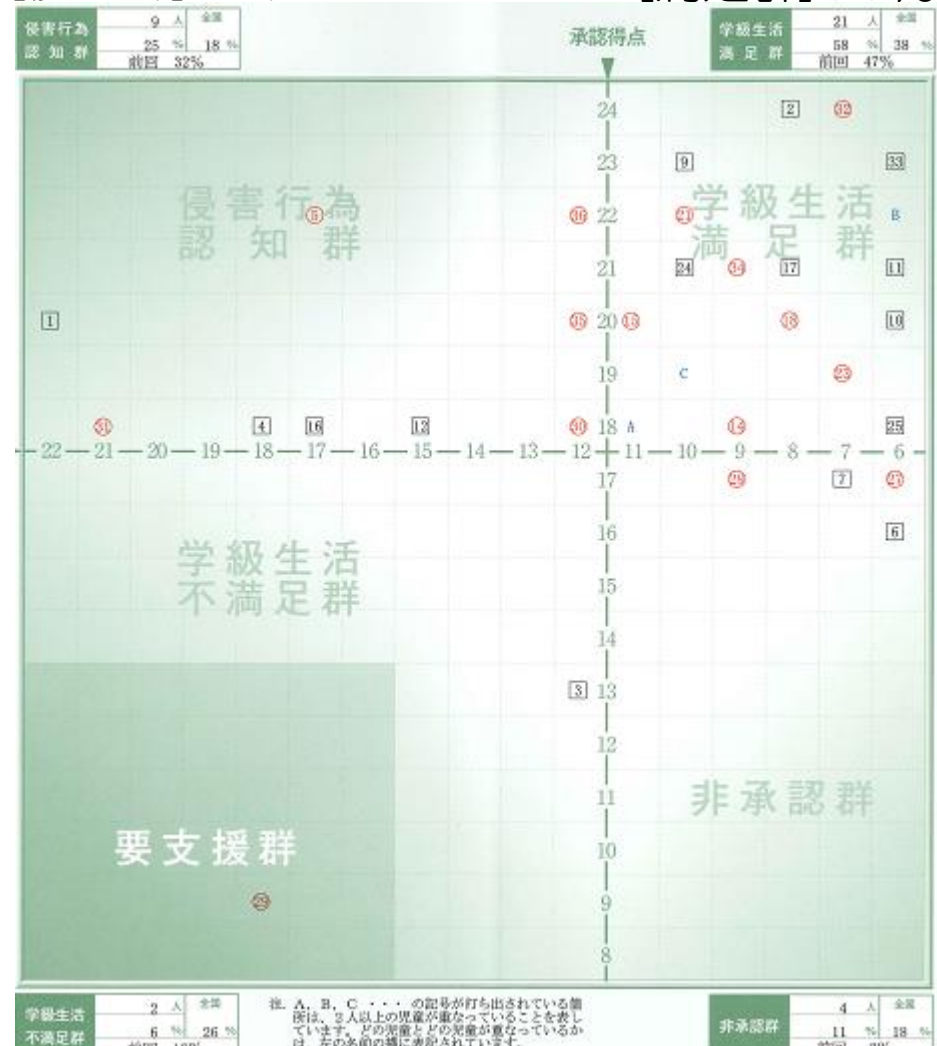
[不満足群]18%

[非承認群]3%

2回目調査時(12月初旬)

[侵害群]25%

[満足群]58%



[不満足群]6%

[非承認群]11%

注: A, B, C...の記号が打ち出されている箇所は、5人以上の児童が重なっていることを表しています。どの児童とどの児童が重なっているかは、左の名前の横に表記されています。

事例①

【アクティビティの実践について】

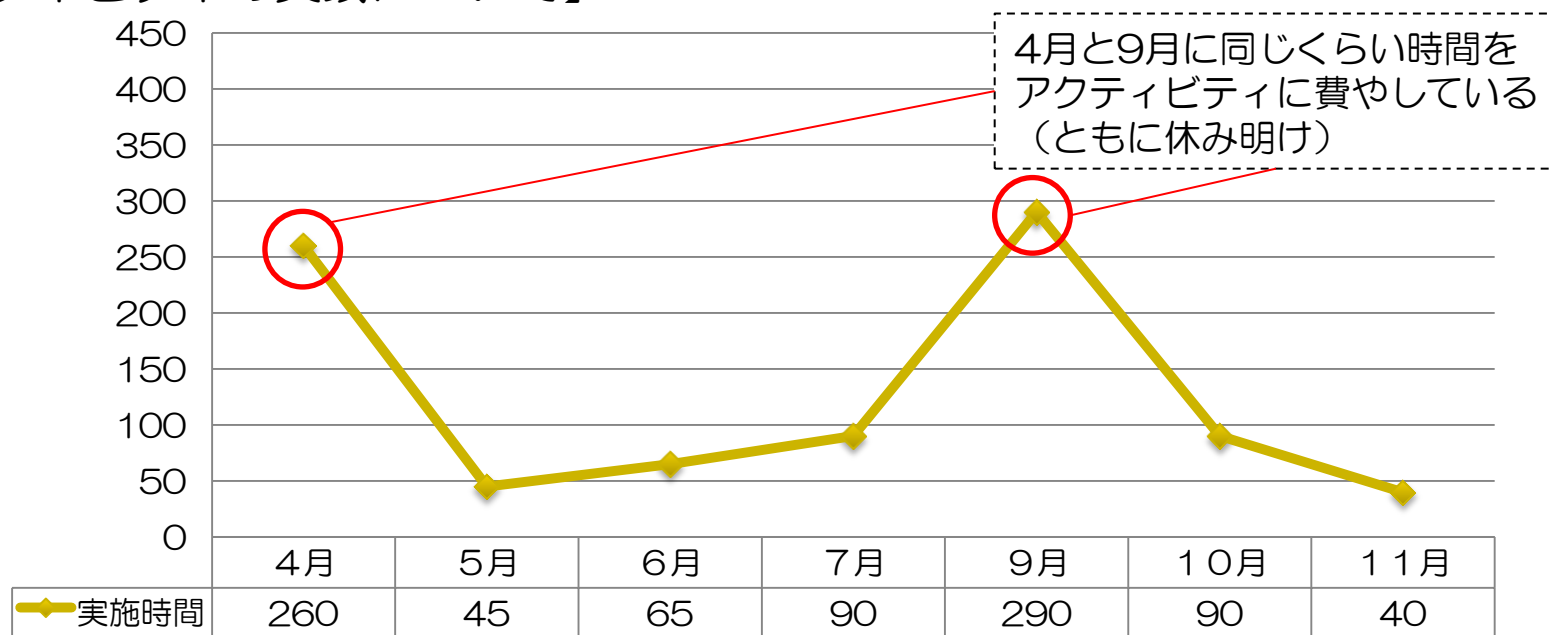


図3 事例①におけるアクティビティ実施時間の推移

【ビーイングの実践について】

①作成の状況

5限をかけて学級目標を作成したあとマシュマロリバーという活動を実施。その際の映像をみながらふりかえりをするなかで、「具体的に必要な行動は？」と問いかけてビーイングを作成（6/27）

②使用状況

- 1日の始めと終わりにビーイングをみて、それについてペアトークやジャーナルで振り返る形で活用
- PAアクティビティを行う時、授業の始めと終わりに確認、など

③役立っていると感じる時／実践上の課題

- 子どもたちが自分の行動を言語化するときのよりどころになっている時
- ビーイングの価値をどう子どもに伝えるかが大切
- もっと気軽に使えばよかった。特に作ったすぐは繰り返し使うこと。

事例②

事例②：4月に出来た関係を土台にして、授業や行事にPAの考え方を取り入れた事例

【対象】 4年生 39名（クラス替えなし、学年は2クラス）

【担任】 前年度からクラス替えもなく持ち上がった男性教員。PAの実践は5年くらい

【4月～1回目の調査まで】

3年次からの持ち上がりであるが、「復習。こう考えていこうねって感じでやっていた。3年次の時に関係を作れていなかった子とかもいたから」と、4月の関係づくり・雰囲気づくりのアクティビティには時間をかけたとのことだった（4月のアクティビティ実施時間は420時間）。

【1回目の調査～2回目の調査まで】

「2学期は行事が多くてできないと思っていた。体育も専科だから、体育でもできない。最も2学期に（PAを）やらなかった1年」と話しているように、4月以降はアクティビティに費やす時間が大幅に減る（特に2学期以降）。しかしながら、「授業自体を変える方がいい。今まではほぼ一斉授業だったけど、協同の授業に。課題に対してどうだった？ぼくたちの関係どうだった？フルバリュウ守れてた？って（ふり返る）。アクティビティのように大きな山はないけど、ずっと続いていく感じ。その中で子どもたちのこうしたいが出てくる。」と語り、アクティビティの構造を授業に取り入れて実践していることがわかる。また、5月の大縄大会、10月の運動会、11月の学芸会などの行事で、ビーイングを活用したり、丁寧にふりかえりをしたりとアクティビティ以外の機会の中でPAの考え方を活かした実践を行っていた。

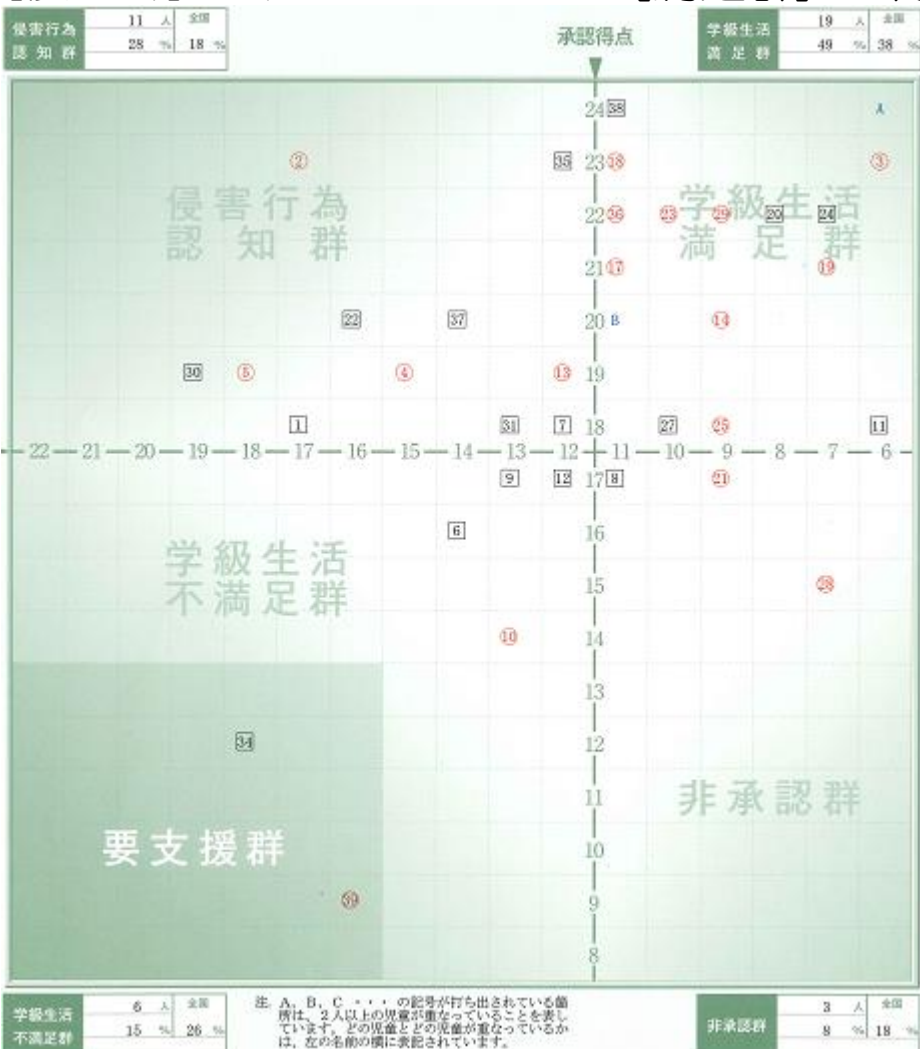
「前にQUをやった時も同じような結果だったけど、その時は超教師主導。その頃に『クラスの中で何が大事？』って聞くと、みんなが『協力！』って言いそう。その頃に比べると、クラスとしてのばらつきはある。自由な感じとも言える。」とも語っている。

事例②

1回目調査時(5月28日)

[侵害群]28%

[満足群]49%



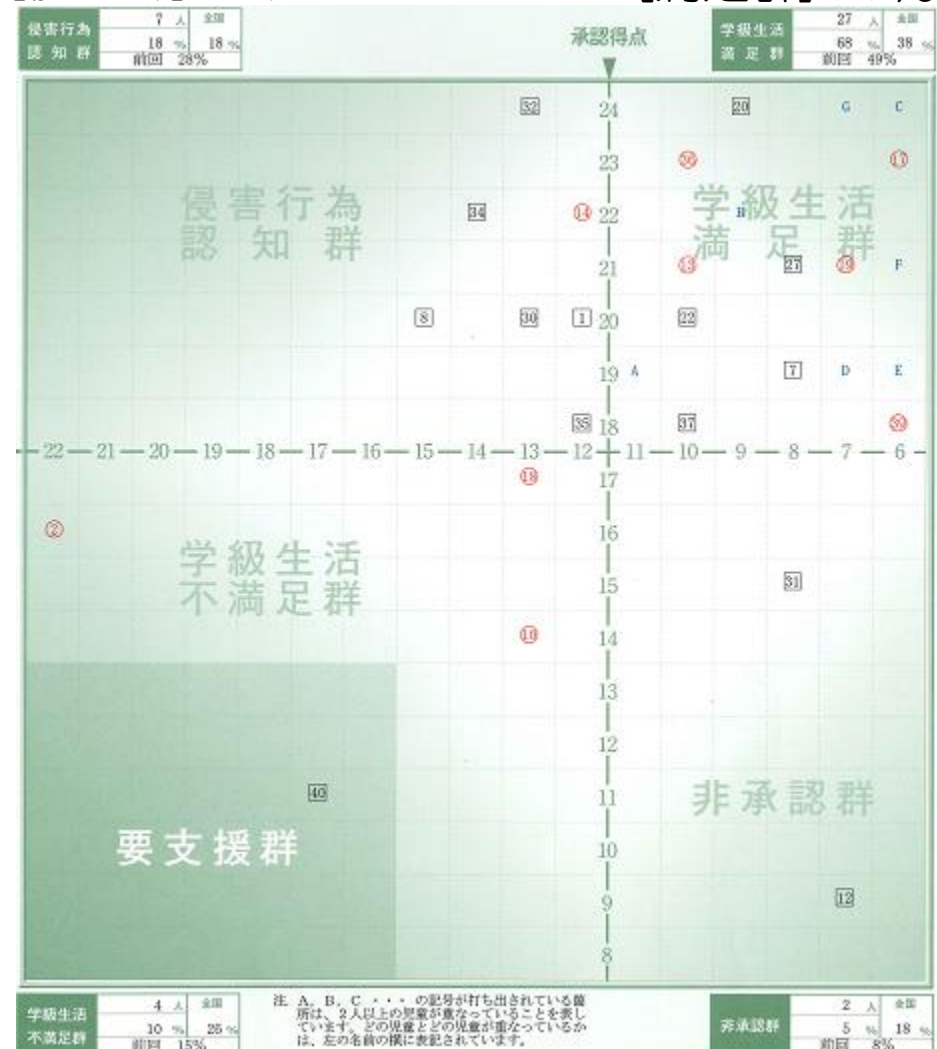
[不満足群]15%

[非承認群]8%

2回目調査時(12月末)

[侵害群]18%

[満足群]68%



[不満足群]10%

[非承認群]5%

事例②

【アクティビティの実践について】

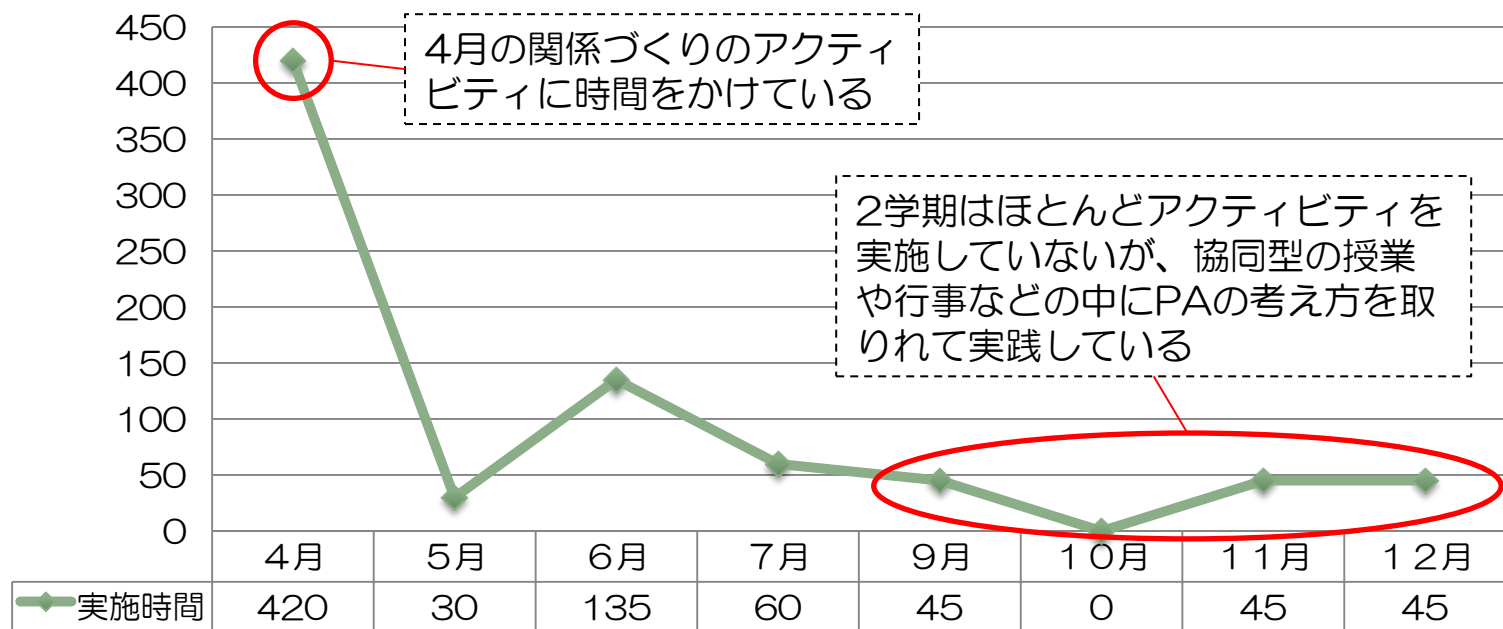


図4 事例②におけるアクティビティ実施時間の推移

【ビーイングの実践について】

①作成の状況

「クラスをチームとして高めていくために大切にしたいこと」と問いかけてビーイングを作成（6/17）

②使用状況

- 授業や行事の前後、休み時間のクラスレクの時、など
- （子どもたちが）書き加えたいと言えば、その時に書き加える

③役立っていると感じる時／実践上の課題

- 「ほら、あそこを書いてあったじゃん」と子どもたち自身で課題を解決することの指針になっている時
- ビーイング（の言葉）にしばられないように注意している
- 大縄などをつくると具体的で実効性がある反面、汎用性がなくて一般化しにくい。長いスパンのビーイングはコミットするのが難しい。

総合考察①：

1回目の調査時には、上半分に散らばった結果になる傾向がみられる（「なれあい型」のプロット）

⇒アクティビティによる関係づくり・雰囲気づくりの効果である可能性

⇒その後のビーイングを使った規範作りが鍵になる

総合考察②：

アクティビティを実施しなくても、関わり合いの
伴う授業や行事などにPAの考え方（ふりかえり・
ビーイングなど）を取り入れることで、同様の効果
が得られる可能性が示唆される

⇒その他の事例を検討し、効果的な実践を検証